



養鶏の夏場対策

～夏季の飼養管理が生産性向上のカギに

●高温は卵殻質低下の大きな原因

気象庁の長期予報によれば、今夏の気温は北海道・東北は平年より低くなるものの、そのほかの地域では平年より暑くなる可能性が高い。生産性が落ちる夏を制することが、年間の生産性向上の要になる。

高温により飼料摂取量が減ると生産性は下がる。また、概ね 28℃を超えると、鶏は少しでも体温を下げようと激しい呼吸をする。しかし激しい呼吸はかえって体温を上げるほか、血中の炭酸ガスが減り、血液の pH を上げ、カルシウムを利用しにくい状態にする。熱い血液は温度の低い肺に集まるため、腸や卵管の血液が不足し、カルシウムの吸収や卵殻形成能力が低下する。結果、カルシウム切れに似た状態となり成績の低下を引き起こす。今回は夏場の飼養管理の留意点や対策を整理する。

●飼料給与についての留意点

- ①エネルギー強化 (ME アップや消化酵素添加) が有効である。また、高温時には油脂が消化利用しやすく、油脂は炭水化物より代謝熱の発生が少ない。
- ②鶏は、主に飼料中のタンパク質を消化する際に発熱量が増加することから、CP をあまり上げない対策を併用することも有効だ。さらに、アミノ酸を十分に添加することも推奨したい。
- ③メチオニン摂取量が要求量を下回ると、卵重が抑制される。余計な熱を発生させないためには、CP ではなくメチオニンを十分に強化することも有効である。
- ④ビタミンやミネラルの強化は、生産性低下や卵質劣化を和らげ、疾病やストレスへの耐性を高める。ビタミンC は夏に要求量が高まるが、鶏は体内でもビタミンC をつくっているため、強化は必要ではない。
- ⑤重曹の添加は熱死や卵質劣化を抑える効果があるため、飼料中 0.1 ～ 0.4% 添加する。重曹は常時添加するとコストの無駄と軟便が懸念されるので、猛暑が予測された時点で飲水投与する場合もある。この場合は 0.2% 程度の添加が望ましい。
- ⑥パブリカの添加は、飼料摂取量低下に伴う卵黄色低下を予防する。摂取量が低下すると産卵量も落ちるため、理論上は卵黄色の落ちは限られる。しかし、産卵量より摂取量低下のほうが著しいため、パブリ

力を通常添加量の 10% 増やすことが目安となる。

- ⑦植物性タンパク原料にはさまざまな性質がある。大豆粕は軟便の発生を誘発するが、卵重を重くする傾向もある。軟便の問題が大きい場合は、菜種粕などを使用する。便が固まってほしい場合は、ふすまやアルファルファなどで飼料中の粗繊維含量を高めることで糞の形を保持することも考えられる。

●飼養管理対策のポイント

- ①産卵後の鶏卵を速やかに涼しい場所へ移す。集卵回数のアップや保管条件の徹底が卵質の劣化防止対策として有効だ。夏場は集卵時間を繰り上げたり、午後引きを実施するなど暑い鶏舎での残卵 (翌日繰越卵) を少なくすることが重要である。
- ②ファンによる送風は鶏の体感温度を下げる効果がある。また寒冷紗に噴霧型ビニールホースで散水し、簡易クーリングパッドとして使う例もある。最近では簡単に取り付けられる簡易型の細霧機能つきファンも市販されているため、長大な配管が必要ない。
- ③屋根への散水や屋根を消石灰などで吹きつけて白色塗装して、熱反射を行うことも有効だ。
- ④酷暑期には給餌を停止し、体熱発生量を抑制することが熱死防止対策に有効である。食後 2 ～ 5 時間は体温が上昇するため、気温の低い早朝に給餌することが望ましい。

環境温度と飼料摂取量の推移

